

時
雨

梅 崎 春 生

薄明の道。落葉たたいて葬列のごと傷ましくも時雨が降つた。私は一人の旅人となり、すすかけの並木道に、蹠根と行き暮れた。さうして谷をわたり野をはしる時雨の姿に、も一度私の感光紙を用意した。三脚の上で、私をも一度私の視野を固定した。ああ、私の季節のアルバムに、かくも打煙る空白の蠟板。

いつの日か渡鳥のひとつみして生きて居た少年の頃から、汪洋として時間の流れが空間にしぶいた。その流れよ、私は座標を失ひ、大虚の星座に位する一個の暗黒星であつた。軌道を外れ、絶望の光芒を放ちながら地平に落下する一個の流星であつた。

記憶の底で私は汽軍となり、月夜の曠野を北に奔つた。季節の忍びやかな去來に、涙が多くなつた頃であつた。錆ついたナイフかざして空しく死を想ふ日があつた。さうして情熱を失つても猶生きて行かうと唇歪めて獨語する私であつた。

行き暮れて私は此處に時雨の音を聞いた。楽しみなき、苦しみなき、喜びなき、惱みなき、白い生活の映射幕に、私の日記は空虚な影像となつて打ちふるえた。しかしその時、私の胸の中に打ちたてられて居た一つの洋館の、蔦茂る西の窓に、幾年古ぼけた洋燈があかあかと點つた。

さてこそ昨日まで足の下を白く流れて居た此の道が、肅條たる時雨の中にくろぐるとその跡を絶つた。さうして蒼白い額して喪心する私の眼のユダツクに、かくも茫漠として薄明の風象が沈下して行つた。――

薄明の道。落葉たたいて葬列のごと傷ましくも時雨が降つた。私は一本のすずかけの木の下に、海盤車のやうに黙然とすわつた。私は私の迷走神經の上を紙魚のやうに走り去る一つの戰慄を知つた。やがて私は聞くであらう。苔の花のやうに戦いて居た私の心臓が、轟然と音立てて青空の彼方に崩れる音を。